



ご挨拶

理事長 **上野 栄一**
(奈良学園大学)

理事長を拝命いたしました上野と申します。

最近の世界情勢をみますと、様々な問題が表面化し、激動の時代という感があります。科学技術ではAI、DXなどの目覚ましい発展があります。最先端医療にもAI、DXが入ってきています。災害についても頻回に起こっています。今夏の猛暑も異常気象で地球規模の異変が起きている感があります。

さて、厚生労働省は、2040年を展望した社会保障・働き方改革について、平成30年10月に「2040年を展望した社会保障・働き方改革本部」が設置され、団塊ジュニア世代が高齢者となる2040年を見据えた検討が進められてきました。2040年を展望すると、高齢者の人口の伸びは落ち着き、現役世代（担い手）が急減するため、「総就業者数の増加」とともに、「より少ない人手でも回る医療・福祉の現場を実現」することが必要であり、今後、国民誰もが、より長く、元気に活躍できるよう、1) 多様な就労・社会参加の環境整備、2) 健康寿命の延伸、3) 医療・福祉サービスの改革による生産性の向上、4) 給付と負担の見直し等による社会保障の持続可能性の確保、といった4つの取組みを進めることとなっています。人口動態をみると、少子高齢化が進み、今、看護に求められるのは、多職種連携など、地域住民の健康を守るための活動が重要になってきました。地域包括ケアが進む中、様々な変化に対応すべく看護も変わると考えています。

さて、看護診断というと、難しい、診断をつけるのが目的ではないかといったお話をお聞きます。看護診断は、診断が終着点ではなく、看護過程の中での、特にア

セスメント後の結果として看護診断が導き出されます。医師が診断技術を持つように、看護師も診断技術をもっていますが、看護診断を導き出すことによってケアにつながります。看護過程は、情報収集から始まりアセスメント、看護診断、看護計画、実践、評価と一連の流れを持ちます。看護診断は、看護過程の中の一つの通過点です。

さて、本学会は「適切な看護を行うために、看護診断ならびに介入・成果に関する研究・開発・検証を行うとともに、会員相互の交流を促進し、また看護診断に関する国際的な情報交換や交流を行うことによって、看護の進歩向上に貢献する」ことを目的としています。

適切な看護を行うためには、看護診断ならびに介入・成果に関する研究・開発・検証は、EBNを構築するためにはとても重要です。特に臨床推論という思考過程が重要です。推論は、科学の基礎で、思考の基になるものです。アセスメントを考える時、現象学の考え方はとても重要になります。看護は、観察から始まります。観察を通して看護過程は始まります。イメージとしては。点の情報から線に結ぶ作業がとても重要と思っています。

現在、日本看護診断学会は、いくつかの課題がありますが、理事会、監事、役員とともに新たなベクトルを決めて運営をしていきたいと思っています。日本看護診断学会での活動が新しい看護の景色が見えるようにしたいと思っています。また、その先にあるのは患者、家族、地域に生活する人の笑顔であると考えています。

今まで築き上げてきた先輩たちの知見を尊び、日本の文化にも根差した新しい用語の開発も必要と思います。特に言葉は、時代とともに意味合いも変わってきます。

この激動の時代は看護の力を求めていると私は信じています。今こそ、学会の運営についても再考して、役員一同、看護の未来のために看護診断を発展させたいと思います。またこのことが看護の質の向上につながればと思っています。関係各位の皆様のご支援をよろしくお願いいたします。

最後に皆様のご健康とますますのご活躍を祈念いたしまして、ご挨拶といたします。



第32回 日本看護診断学会学術大会 大会長 挨拶

【大会テーマ】

新時代の看護のかたち～看護の質保証に向けて～

大会長 **吉岡 さおり** (京都府立医科大学)

この度、第32回日本看護診断学会学術大会を令和8年(2026年)7月18日(土)～19日(日)の2日間、

京都で開催させていただく運びとなりました。京都での開催は、第3回大会、第18回大会、第23回大会に続く

て4回目となりますが、第30回の記念大会を経た新しい時代の学術大会を京都の地で開催する機会をいただき、大変光栄に存じます。本学会の会員の皆さま、関係者の皆さまに心より感謝申し上げます。

第32回大会の大会テーマは「新時代の看護のかたち～看護の質保証に向けて」と致しました。大会テーマにある「新時代」とは、社会情勢、医療情勢が変化した現代において、高度急性期医療の発展、在院日数の短縮化、クリニカルパスの普及、地域包括ケアの推進に伴う地域完結型医療への変革、さらに、AIなど新しいテクノロジーの進化によるDXの加速化など医療や看護を取り巻く環境や技術、考え方や人々の価値観の変化を意味します。このような状況において、ラベルとしての看護診断を看護記録システムから外す施設も多くなっている現状があります。その一方で、看護診断は単なるラベルではなく、看護の現象をとらえた共通用語、看護介入の選択根拠であり、かつ、看護の思考に基づく臨床判断のプロセス、すなわち看護過程そのものであるといえます。このことから「看護のかたち」とは、看護の現象を概念化・可視化して「かたち」にすること、そして、看護の対象

となる人々の物語を看護の専門性と紡ぎながらケアを創造（かたちに）していくことをさしており、今こそ看護診断の意義や重要性を再考する時期であると考え、本大会のテーマとしました。そしてこれらについて皆さまと共に考えていくことにより、看護の質保証につながるものと考えております。

大会プログラムにおいては、「看護のかたち」「看護の質保証」を哲学的視点や組織行動論から読みとく特別講演、AIの活用による看護の質保証に関する教育講演、新時代の教育ツールや看護記録システムに関するシンポジウムなど、明日からの教育・実践・研究に活用できる内容を企画しております。また、一般演題や交流集会にも奮って登録していただき、研究成果の発表や日々の取り組みに関する情報交換やディスカッションで交流を深めていただきたいと思います。

看護の質を保証し、看護の独自性、専門性を次世代につなぐ看護過程について多様なアイデアや知識を共有する場となりますよう、企画委員一同、皆さまのご参加を心よりお待ち申し上げます。

第31回 日本看護診断学会学術大会を終えて



第31回日本看護診断学会学術大会 会長 升田 由美子 (旭川医科大学)

第31回日本看護診断学会学術大会は、2025年8月2日(土)・3日(日)の2日間、旭川市大雪クリスタルホールにて開催いたしました。北海道らしからぬ暑さの中でしたが、天候にも恵まれ、全国から268名の参加者をお迎えし、盛会のうちに終了いたしました。

本大会のメインテーマは「もっと活かそう！看護過程・看護診断」であり、看護実践の基盤である看護過程・看護診断のさらなる活用と発展を目的として開催しました。大会では、大会長講演、特別講演、教育講演、シンポジウム、交流集会が行われ、一般演題として口演8題、示説10題の発表がありました。

大会長講演では、旭川で開催された第19回大会を振り返りつつ、現在の看護診断の活用状況や課題、看護基礎教育における看護診断教育の意義について、「生活」に焦点を当てた看護との関連からお話いたしました。

教育講演では、「看護過程・看護診断のわかりやすい

教え方」「看護過程のアセスメントから最適なケアへの実践について」「看護学生・看護師の思考過程を育てる」など、教育と臨床の両面に関わるテーマを深く学ぶ機会となりました。

シンポジウムⅠ「看護診断がつなぐ病院と訪問看護ステーションの看護」では、病院と訪問看護ステーションの連携実践が紹介され、共通用語としての看護診断の有効性や課題について活発な意見交換が行われました。

シンポジウムⅡ「看護基礎教育と臨床の現状—看護過程と看護診断の未来—」では、看護基礎教育と臨床現場の接続に焦点を当て、大学教育での看護診断教育と、大学病院における実践の現状が共有されました。

特別講演「NANDA-I看護診断分類2024-2026：何がどう変わった？」では、診断名の大幅な刷新の背景や日本語訳の見直しの経緯が紹介され、著者ご本人ならではの貴重なエピソードを交えた最新情報を知る機会となりました。

交流集会では、アドバンス・ケア・プランニングや日本発の看護診断の必要性など、実践に根ざしたテーマが取り上げられました。また、看護診断の背景となる看護

理論を踏まえ、日常生活動作に関する援助における看護補助者との連携をテーマとした学会企画では、今後のタスクシフト・タスクシェアに関する示唆が得られました。

本大会を通して、病院と在宅の連携のあり方、教育と臨床の橋渡し、そして看護補助者への的確な指示を支える理論的基盤の重要性など、多くの学びと示唆が得られました。活発な質疑応答が行われ、参加者同士の知見の共有とネットワーキングも深まりました。

参加者数は目標の300名には届かなかったものの、道外からの参加者が半数を占めたこと、また演題数が増加したことは、会員の皆さまのお力添えの賜物と感謝申し上げます。

さらに、旭川市内ならびに富良野市・名寄市など近隣地域の看護系大学・看護学校、そして旭川医科大学病院看護部の皆さまには、拡大実行委員として学会前日から当日の準備・運営にご尽力いただきました。心より御礼

申し上げます。

本大会は、多くの学びを得るとともに、看護診断および日本看護診断学会の今後の発展を展望する貴重な機会となりました。ご参加くださった皆さま、演者、シンポジスト、座長の先生方、そして運営にご協力くださったすべての皆さまに、改めて心より感謝申し上げます。

来年は京都で、またお目にかかれることを楽しみにしております。



第31回 日本看護診断学会学術大会に参加して

札幌医科大学 原田 由香

今回は精神看護学において早期に看護診断教育を実践する際の紙上事例を用いた展開における工夫と実践について報告する機会をいただきました。具体的には、2年次後期にNANDA-Iの看護診断の定義と分類を用いて、可視化されにくく、想像力が求められる精神・心理社会的アセスメントをしてもらうために、学生たちの生活体験を生かして捉えられるような身近な事例の工夫や、学生たちが普段用いている常用語による表現から看護の専門用語への変換などについてです。看護診断は、国際的に通用する看護の共通言語であるだけでなく、可視化されにくく、表現しにくい精神・心理社会的アセスメントをする上で看護師間はもちろんのこと、多職種と連携・

協働する際にも共通言語になり得ると考えています。

しかし本大会において臨床現場での看護診断の活用不足や会員数の減少により、看護診断学会は存続の危機に直面していることが指摘されていたことから、臨床現場において活用可能なように学生の時期に看護診断の基礎的な理解を深める必要性を痛感しました。

またNANDA-Iの原著編集に携わっている上鶴先生の講演では、診断名の修正経緯などについて解説していただいたことから書籍では得られない新たな診断名の意図や背景からの理解を深めることができ、非常に有意義な時間となりました。

第31回 日本看護診断学会学術大会に参加して

旭川医科大学病院 渡邊 充広

第31回日本看護診断学会学術大会は、「もっと活かそう！看護過程・看護診断」をメインテーマに、開催されました。シンポジウムⅠは「看護診断がつながる病院と訪問看護ステーションの看護」、シンポジウムⅡは「看護基礎教育と臨床の現状—看護過程と看護診断の未来」として、臨床と教育の両者における看護診断の最新の動向と今後の課題について議論されました。学術集会に参加することで、看護診断は的確な看護実践を導き、共通言

語で看護を伝えることができる一方で、看護診断の普及が課題であることを理解出来ました。研究報告では、病院や施設等の両者が看護診断を導入することにより、患者の的確な把握と看護をつなぐことが出来た等の取り組みを拝聴し、改めて看護診断の有用性を認識することができました。

私は25年間、病棟看護師として看護診断を活用し、看護を実践してきました。現在、当院の在院日数は10

日で、看護過程を迅速に展開していくことが重要となっています。今回の学術大会に影響を受け、当病棟におけるカンファレンス実施方法を見直しました。入院当日の患者を複数の看護師でアセスメントし、看護診断することを試みております。この方法は看護診断を用いること

で在院日数の短縮化においても速やかに看護介入が出来ることに加え、看護診断の教育の場にもなると考えています。今後も看護診断学会の動向に注目し、現代のニーズに即した看護診断の活用方法を模索し、看護の質向上に寄与していきたいと考えます。

国際交流委員会からのお知らせ

国際交流委員会 委員長 榎 由里 (京都大学大学院)

国際交流委員会では、海外関連学会の動向に関する情報提供、本学会の活動を海外へ発信するためのホームページ活用、そして海外学会との情報交換の三つを柱に活動を進めています。引き続きよろしくお願いたします。

次回のNANDA-I Conferencelは、2027年6月にスペイン・Navarraで開催される予定です。関心をお持ちの方は、ぜひ今から情報収集を始めてみてはいかがでしょうか。

なお、NANDA-Iのホームページでは、組織名をInternational Nursing Knowledge Association (INKA) として、単なる診断にとどまらず、臨床推論・評価・看護過程の統合や、診断を説明する理論の開発を強調する姿勢を示しています。こうした国際的な動きを注視しながら、国際交流委員会では、今後も会員の皆さまへ最新情報をお届けしてまいります。

日本看護診断学会研究助成のお知らせ

研究助成選考委員会 委員長 新井 祐恵 (西九州大学)

日本看護診断学会には、日本における看護診断を発展させ、看護の質の向上を図ることを目的とした「研究助成制度」があり、50万円を上限として研究費を助成しています。申請手続きは、日本看護診断学会ホームページ (<https://jsnd-kango.jp/>) にある研究助成をクリックしていただき、研究助成募集要項をご確認ください。募集要項にある「研究助成申込書」「研究経費支出計画書」を作成し、日本看護診断学会事務局に送ってください。申請する研究は、看護実践において普段取り組んでいることで、看護診断だけでなく看護過程・臨床判断など幅広い分野で募集します。

助成を受けた場合、研究成果を日本看護診断学会学術大会で発表していただくとともに、学術誌へ投稿していただくことになります。これは、他施設の看護の質の向上も図っていくという研究成果による社会貢献を目的としています。2025年度の申請締め切りは、2025年12月末です。皆様からの応募をお待ちしています。

論文を募集しています！

編集委員会 委員長 大川 明子 (三重県立看護大学)

編集委員会では、看護診断および看護過程や看護アセスメント等に関連する未発表の原著、総説、研究報告、実践報告、事例報告、資料の論文を随時、募集しています。提出期限は毎年10月末となっております。会誌『看護診断』は、2022年3月より電子投稿となっております。詳しくは学会ホームページをご覧ください。

看護実践の貴重な資源となりうる論文の投稿を心よりお待ちしております。

入会のご案内

本学会は適切な看護を行うために、看護診断ならびに介入・成果に関する研究・開発・検証を行うとともに、会員相互の交流を促進し、また看護診断に関する国際的な情報交換や交流を行うことによって看護の進歩向上に貢献することを目的としています。是非、多くの方々のご入会をお待ちいたしております。ご入会に関しましては私共のホームページ(<https://jsnd-kango.jp/>)入会案内の新規入会よりオンラインにてお申込みくださいますようお願い申し上げます。

入会手続きに関するご不明点は 日本看護診断学会事務局

TEL:03-3352-6223 E-mail:jsnd@convention-axcess.comまでご連絡をお願いいたします。

日本看護診断学会ニュースレター 第28号

発行日 2025年12月1日

編集委員／大川明子、山田紋子、茂木泰子、浅場香、伊藤雅浩

